

〈太田至総編集 アフリカ潜在力 3〉
高橋基樹・大山修一編、『開発と共生の
はざま—一国家と市場の変動を生きる』
京都大学学術出版会, 2016 年, 430 p.

辻村英之*

本書の分析課題

本書は、「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」（研究代表者・太田至）の成果として刊行された、アフリカ潜在力・シリーズ全 5 巻の内の 1 冊である。「紛争を解決して共生を実現するための」アフリカの「知識や技術、制度など」の実証と、そのような〈アフリカの人びとが培ってきた「潜在力」〉を、「根元的な共生の思想として把握する」のが、この日本人 50 名以上、アフリカ人を中心とする外国人 20 名以上が参加する共同研究の目的であるという〔太田 2016〕。

そして本書（『開発と共生のはざま—一国家と市場の変動を生きる』）自体の目的は、「主に人びとの暮らしの開発と経済の側面に注目し、変化に直面しながら、暮らしの困難を乗り越え、他者との共生を求め、あるいは他者との関係を作り変えながら、生き抜いていこうとする人びとの潜在力のありようを描き出すこと」とされる〔高橋・大山 2016a〕。

すなわち、主に経済開発をめぐるアフリカの人びとの暮らしの変化（特に国家と市場の変化の影響）に着目し、他者との共生を求めたり関係を作り変えながら、困難を乗り越え

て生き抜いていく「潜在力」のありようを描き出すこと、さらにはそこから、根元的な（世界中で参考にできる）共生思想を読み取ることが本書の目的といえる。

本書の結論

上記の目的（分析課題）に対応する結論について、以下のようにまとめることができる。

「浸透途上の市場に関わるなかで、市場における活動の目的や実践のしかたに、自分たちの生きる上での目的、人間関係についての考え方、その他の価値観を、反映させている」が、そこに「今日のアフリカの人びとならではの、開発と共生に向けた潜在力を読み解く鍵を見出すことができる」。「人びとは大きな変動の影響を受け、脆さをかかえながらも、絶えず、変化を捉え返し、自分自身で生きざまやお互いの関係を変える変化のしなやかな担い手」である。その「変化のしなやかな担い手」（動態的・流動的、複合的、かつ多面的な生き様であり、考え方）を、著者たちは、開発と共生をめぐる「アフリカ潜在力」と捉えているように読める。

ところがその「しなやかさは同時に人びとの営みの脆さをも意味している」。「共生と相互の協力は、利害の分裂を往々にして越えられず、比較的狭い人間観、地域や集団の範囲から拡大することができない」ため、「協治」を促すための国家、自治体の役割が大きい。しかし現況としては、国家と人びとの間の大きな空隙があり、その役割を見込めない。ただしこの空隙こそが、人びとの潜在力の闊達

* 京都大学大学院農学研究科

な発揮を可能にしており、欧米における「管理社会によって支えられる福祉国家体制の大きなほころび」と比較した場合、ここにアフリカ独自の発展方向があるという。著者たちはこれを、世界中で参考にできる「根元的な共生思想」と位置付けているように読める[高橋・大山 2016b]。

「アフリカ型」農村開発と「互助精神」

さて評者は下記のように、「アフリカ型」農村開発を考える議論に参加している[辻村 2017]。農村に限定されるが、そこに〈開発と共生をめぐる「アフリカ潜在力」〉に類似の概念がある。

掛谷誠・伊谷樹一などを中心とする、共同研究「地域研究を基盤としたアフリカ型農村開発に関する総合的研究」[掛谷・伊谷 2011]は、「創造的模倣」（外来の技術・知識を模倣し工夫を加えて、自らの村の自然や社会の状況に適応させる応用力）、「在来性のポテンシャル」（地域農村の生態・社会・文化の独自性と、それらの相互関係の歴史的な累積体がもつ潜在力）、そのポテンシャルを支える要素群との関係を明確にする「焦点特性（開発の対象となる地域の焦点となる特性）」という新たな概念を導入し、特に後者の2つの概念に基づく農村開発を、「アフリカ型」農村開発の理念・手法のひとつとする。

しかし「在来性のポテンシャル」「焦点特性」のアフリカ型（独自性）を提示するには至っておらず、さらなる「アフリカ諸地域の在来性に根ざした独自の集約化」の事例分析が求められるという。

評者の調査地であるタンザニア・キリマンジャロ山中においては、同書で挙げられているアフリカ諸地域の在来性の中で、開発の阻害要因とされることが多い「社会的平準化機構」については弱体化している。しかし「互助精神」については未だに強く、資金的に余裕がある村民が、そうでない村民を支援、指導する立場になる。

「アフリカ型」農村開発と「互酬性」「サブシステンス」

ハイデンは、政府・市場からの自立性が著しく高い「情の経済」（血縁・地縁などに基づく互酬的な経済関係）や「小農生産様式」（家族労働主体の生産、利益追求より生存維持を優先、などの特質）を破壊しない限り、政府が促す近代化・農村開発から、アフリカ小農民は容易に逃れてしまう（他の社会階級に捕捉されない）という[Hyden 1980]。

そして杉村和彦・鶴田格などを中心とするアフリカ・モラル・エコノミーの研究グループは、そのハイデンの議論を読み替え、あるいはその後のハイデンが、「情の経済を、人々が単にいきのびたり社会を維持したりするだけでなく、社会開発につながる積極的・創造的な活動をににいうものにとらえている」部分をすくい上げて、内発的発展の「内発性」「自立性」を考える手がかり、あるいは内発的発展の規範として、「情の経済」などの「アフリカの共同体的伝統」を位置付け直している[鶴田 2007]。鶴田は特に、自給的な食料生産や世帯間での財交換への依存度が高いという、アフリカ農村のサブシステンス

ス、市場からの自立性に着目している〔鶴田 2012〕。

キリマンジャロ山中の農村においても、この互酬性、生存優先性、自給性重視の価値観・行動を確認できる。換金作物のコーヒーなどは「男性産物」と呼ばれ利益を追求する。しかしそれに特化することはない。主食であるバナナなどを「女性産物」と呼んで同等に重視し、それによって「自給性」が追求される。また「男性産物」の販売収入は、教育経費に優先的に向けられるが、さらに剰余金があれば、「互助」目的にそれを利用するのが「プライド」である。

論点1 「政府・市場からの空隙」をめぐる

アフリカの独自性としての「国家と人びとの間の大きな空隙」を「政府からの空隙」と呼称しよう。そして、市場における競争原理をそのまま受け入れるのではなく、「市場における活動の目的や実践のしかたに、自分たちなりの生きる上での目的、人間関係についての考え方、その他の価値観を、反映させている」ことは、市場という外来制度の「創造的模倣」と表現することもできるが、それを「市場からの空隙」と呼称しよう。「市場からの空隙」については家族労働主体、生存優先、自給重視であると具体化されており、完全に重なるわけではないだろうが、本書の著者たちが主張するこの2つの空隙は、ハイデンの古くからの主張、そして現在のモラル・エコノミー研究グループの主張と同様のものである。

評者もキリマンジャロ山中の農村において、開発が進んでも、若者であっても、この

2つの空隙が維持されていることを確認している。今後の大きな開発や変化を経ても維持される、アフリカの独自性と位置付けることができるように思う。

ただこの2つの空隙や、その特性がゆえに発揮される「変化のしなやかな担い手」を、どのように「開発と共生に向けた潜在力」として活かすかについて、掛谷・伊谷のような具体的提示にまで至っていない。

著者たちも触れているが、それらの基礎単位は、ハイデンがいう「血縁・地縁などに基づく関係」であり、たとえば互酬、生存優先、自給重視の価値観・行動の単位を、他民族や他国との間にまで拡張していくには、それこそ大きな「空隙」がある。掛谷・伊谷の議論も、「諸地域の在来性」「地域農村の生態・社会・文化の独自性」に焦点を絞るものであり、アフリカ農村全体に当てはまる一般性の探求は困難に思う。世界全体への拡張（根源的な共生思想として位置付け）はなおさらである。

現在、進行中の第2次アフリカ潜在力研究会でどのように議論がなされるのか注目したい。

論点2 「アフリカ潜在力」をめぐる

なぜ開発・共生に向けて既に「顕在」している力ではなく、「潜在」力なのだろうか。実際、各章で鮮やかに描き出された「変化のしなやかな担い手」は、研究者が外から観察した「顕在」力なのではないだろうか。アフリカの人びとが自ら顕在化できず、先進国の力で引き出してあげるという、外発的發展を

望ましいとする議論になってしまわないだろうか。

外発的発展の主張を回避するために重要なのは、掛谷・伊谷の議論のような、内発的発展を促すための「焦点特性」とする在来のもを中心に据え、それを補う外来のものを「創造的模倣」とするという仕分けであろう。

実際、第 2 次研究会において高橋基樹は、「アフリカ潜在力」をめぐる評者からの質問に対して、アマルティア・センのケイパビリティ論の援用を検討していると回答した。アフリカの人びとが開発によってめざす状態（ウェル・ビーイング）とそのために必要な機能、その中でアフリカの人びとが選択できる機能（ケイパビリティ）とそうでない機能（それゆえ「潜在」している）を明示する分析になり、上記の仕分けをやりやすくするだろう。

あるいは上記のような、血縁・地縁などに基づく関係の範囲での「顕在」を、他民族や他国との間に拡張することの「空隙」の大きさを、「潜在」という言葉で強調しているのかもしれない。

引用文献

Hyden, Goran. 1980. Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and an Uncaptured Peasantry. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

掛谷 誠・伊谷樹一編. 2011. 『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会.

太田 至. 2016. 「刊行のことば」高橋基樹・大山修一編『開発と共生のはざまで一国家と市場の変動を生きる』京都大学学術出版会.

高橋基樹・大山修一. 2016a. 「アフリカの変動、

そして開発と共生に向けた潜在力」高橋基樹・大山修一編『開発と共生のはざまで一国家と市場の変動を生きる』京都大学学術出版会, 1-19.

_____. 2016b. 「開発と共生に向けたアフリカの潜在力とは」高橋基樹・大山修一編『開発と共生のはざまで一国家と市場の変動を生きる』京都大学学術出版会, 401-422.

辻村英之. 2017. 『キリマンジャロの農家経済経営—貧困・開発とフェアトレード』昭和堂（近刊）.

鶴田 格. 2007. 「モラル・エコノミー論からみたアフリカ農民経済—アフリカと東南アジアをめぐる農民論比較のこころみ」『アフリカ研究』70: 60.

_____. 2012. 「フェア・トレード商品の生産農家の多様性に関する一試論—地域間比較とサブシステンスの視点から」『農林業問題研究』48(2): 138-143.

〈太田至総編集 アフリカ潜在力 4〉

重田眞義・伊谷樹一編. 『争わないための生業実践—生態資源と人びとの関わり』京都大学学術出版会, 2016 年, 360 p.

坂梨健太 *

「何と平和で安全か。」本書の帯の言葉である。アフリカの地域社会は、人口増加や自然環境の劣化に伴って争いが絶えないというイメージをもたれるかもしれないが、それを覆すことに本書は成功している。冒頭の言葉は 70 年代にアフリカで調査をおこなった嘉田由紀子（前滋賀県知事）から寄せられた。つまり、農村調査で抱いた彼女自身の感慨が正しかったと、長い年月が経っても確信を抱か

* 龍谷大学農学部